

Title	学術研究における学際コミュニケーションの円滑化 : 北陸先端科学技術大学院大学21世紀COEプログラムにおける事例((ホットイシュー) 次の学際・融合研究に向けて (7), 第20回年次学術大会講演要旨集II)
Author(s)	葉山, 稔; 奥津, 祥子
Citation	年次学術大会講演要旨集, 20: 964-967
Issue Date	2005-10-22
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/6205
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

○葉山 稔, 奥津祥子 (北陸先端科学技術大学院大)

1. 研究の背景と目的

近年、学問の細分化によって専門性は高まったが、複合的な領域の研究や問題解決の必要性が高まったことから、学際研究の重要性が意識されてきている[1]。そのことから、学際コミュニケーションの目的は、複数の専門分野が互いに協力や融合を行いながら自然や社会の複雑な現象を究明したり、新たな学問を創造したり、現実の問題を解決したりすることを促進することであると言える。学際コミュニケーションの利点は、複合的問題に対して、複数の分野からの視点や知見を得ることで、それを単一分野で行う場合以上に妥当性の高い解決策を出ることができるという点である。

本学の知識科学研究科は、その目標の一つとして文理融合をうたっている。それゆえ、学際研究を行う土壌があるといえる。そして、学生レベルで学際コミュニケーションを行うことにより、学際研究に貢献できる人材を育成することができると考えられる。

本稿では、学際コミュニケーションの円滑化という観点から、学際コミュニケーションの目的、その際に起こる障害(コンフリクト)と解決法としてのアコモデーションという概念について述べ、実例から観察された結果についての検証と示唆について論じる。

2. 学際コミュニケーション

2.1 学際研究とコミュニケーション

学際研究とは、「諸科学の協力による研究」[1]である。学際コミュニケーションとは、異分野に属する者が集まり、ある問題について議論し合うことで学際研

究を進めることである。

そもそも、コミュニケーションとは何であるのか。その言葉の定義は多様であるが、主に以下の4つに分類されると言われている[2]。

- ① 相互作用過程説：人間のコミュニケーションは人間・社会関係の基礎であり、他者を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程で、状況全体の動きに応じてダイナミックで、常に変化する動的なものである。
- ② 刺激-反応説：送り手としての個人が受け手としての他者の行動を変容させるために、刺激(通常は言語的記号)を伝達する過程である。
- ③ 意味付与説：記号を選択・創出・伝達することによって、伝達者と同じ意味を受け手が知覚できるようにする過程である。
- ④ レトリック(修辞)説：ある状況(場面)のもとで、個人(行為者)がメディア(手段)を選択したうえでシンボルを駆使して(行為)、意図されたある特定の目的を達成するために(目的)する行動である。

つまり、コミュニケーションとは、「あるシステムから別のシステムへの言語記号および非言語記号による情報の移動を含む過程」であり[3]、組織・社会等において伝達、相互理解、説得、目的達成等を行うことそのものであると言える。

2.2 コンフリクト

学際研究においては、議論を進める際に多くの障害・

対立が生じており、それについての研究も進んでいる[4]。では、議論の障害（コンフリクト）はなぜ起こるのであろうか。[5]では、理性的に討議しても合意に達しないことの原因を、ロールズの唱えた「判断の重荷」という言葉を用いて説明している。学際コミュニケーションに深く関係すると思われる判断の重荷は以下の通りである。

- ① 考慮すべきことの種類について十分合意している場合でさえも、その重要さについて意見が一致せず、異なった判断に到達する。
- ② 私たちの考え方はすべて、ある程度、あいまいであるから、難しいケースでは変化を受けやすい。この不確定性のために、私たちは理性的な人でもある程度の範囲内の違いが生じうる判断と解釈に頼らざるをえない。
- ③ 証拠を評価し、道徳的・政治的価値を考慮する仕方は私たちのそれまでの人生の全経験によって形成される。経験したことが違えば、判断も違ってくる。
- ④ しばしば、異なる種類の規範的考察が一つの問題の両面に異なる有効性を持つことがあり、全体にわたる評価が難しい。価値の基本的な衝突があつて、二つもしくはそれ以上の両立しえない行動指針に対して、それぞれに十分な根拠があると思われる。

また、[6]はコミュニケーション障害の要因を4点挙げている。

- ① 心理的要因：コミュニケーションを行う人々の欲求、要求、期待、態度、知覚などの要因が異なるために、コミュニケーションがスムーズに行われなくなることによって生じる。感覚器官を通して入ってくる情報全てを消化吸収できないため、その一部だけを、内部の欲求、期待、態度、関心といった要因によって選択的に知覚してしまう。
- ② 組織的要因：組織における人々の役割、地位、権限、規範などの要因や組織風土が異なるために起こるコ

ミュニケーション障害である。

- ③ 環境的要因：物理的距離が離れていて聞きにくい、文字が見えにくいなどといったものや、政治的文化的要因によって生じるコミュニケーション障害などのことである。文化的要因がコミュニケーションにおけるコンテキストを形成するため、文化の違いが低コンテキストの原因となり、それがコミュニケーションを困難にする。
- ④ 言葉の意味上の要因：同じ言葉であってもそれを伝達する人と受け取る人とは意味が異なることによって生じる障害である。言葉には、辞書的に規定された意味である「外延の意味」と、個々人がそれぞれの個人的経験や価値観あるいは習慣などに基づいてある語について持つ意味である「内包の意味」があり、同一語であっても異なった意味で用いられている。

これらの要因が相互に関連し合つてコミュニケーションを阻害している。その要因を学際コミュニケーションに照らし合わせて二点にまとめると、一つは強引に意見の一致（コンセンサス）を求めることで、学際コミュニケーションの持つ長所である、多様な価値観からの多様な見解を互いに出し合うという点を一切無視することになるという点である。もう一つは代案を示さずに単純な否定のみを行い、議論を滞らせてしまうという点である。

[7]では、コミュニケーションは単なる意見交換以上のものを含むものであり、情報不足が解消すれば解決するような対立を「弱い対立」、既存のものの見方・考え方そのものを再編成して新しい魅力ある考え方を創出できないければ解決しなければ解決しないような対立を「強い対立」と呼ぶならば、単なる意見交換を越えてなお議論するのは、強い対立であっても互いの既存の考え方を再編成して魅力的政策案を創出すれば克服できるかもしれないという期待があるためである、とされている。

このような期待を満足させることは本来容易ではない。特に、利害や価値観が一点に収束するという意味での合

意（コンセンサス）を達成することは学際コミュニケーションにおいては非常に難しい。それは、異分野間の人々の間には、「判断の重荷」や、障害の心理的、組織的、環境的、この場の意味上の要因などが、同一分野間の人々の場合よりも明らかに存在し、しかもその度合いが深刻であることが大変多いからである。それゆえ、コンセンサスに代わるより学際に沿った概念が必要となる。

2.3 アコモデーション

様々な価値観が並立しながら、それぞれが他を受け入れている状況をアコモデーションという。また、アコモデーションの状態は、価値観の分散とその緩い結合として特徴付けられ、そこでは、システム全体をリードする役割を担う主体は固定的ではなく、それぞれの場面において異なった価値観が主導権をとる[8]。このアコモデーションという状態を、学際コミュニケーションにおけるゴールと定めることによって、コンフリクトを解決し、学際コミュニケーションをある建設的な方向へ導くことができると考えられる。

3. 学際コミュニケーションの実例およびその分析

そこで、議論の円滑化という点に焦点を当て、北陸先端科学技術大学院大学 21 世紀 COE プログラムにおける学際コミュニケーション研究会を事例としてとり上げ、その際の議論の進め方と議論の結果からアコモデーションの重要性について述べる。

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 COE プログラムのもとで、学際コミュニケーション研究会が進められている。目的は、様々な分野の学生が集まって、学際に関連するテーマについて議論をする中で、各自が意見を交換し、自分とは異なる分野の価値観に触れたり、異分野間の問題に対する認識の差異を実感したりすることによって、学際的視点及び異分野の人々と議論をする能力を養おうということである。また、コミュニケーシ

ョンを通して、自らの研究テーマの内容を深めたり、新たな刺激を与えたりすることをも狙いとしている。

現在、「学際コミュニケーションカフェ」という企画が進められている。カフェにおいては、集まった学生が比較的身近なテーマについて話をしている。カフェでは、結論及びコンセンサスを得ることを目的とはしていない。他分野の人と出会い、互いの価値観や意見を知り、知的好奇心を刺激することにより、各自が自分なりにテーマに対する考えを深めることを目的としている。

それを達成するために、次のような点に注意している。一つは、専門用語をできるだけ排し、使用する場合は必ずわかりやすく簡潔な説明をつけるということである。異分野の人々に、専門性の高い話をするとう理解ができなくなり、議論が滞るからである。二つ目に、確かな根拠に基づかない、あるいは代案を示さない破壊的批判を減らし、建設的批判を行ってもらようにしている。三つ目に、無理にコンセンサスをとらないということである。

この三点の達成のため、司会者もしくはコーディネーターは、議論を上手くコントロールすることが求められている。専門用語が出た場合は説明を促す、破壊的批判をする者に対しては注意を促す、コンセンサスをとらないように価値観の多様性を認めるように示唆するという工夫が求められる。

実例として、「一般教養とは何か」というテーマについての議論を取り上げる。当初、一般教養という言葉と一般常識という言葉の違いが問題として現れた。その違いについては、一般常識は「社会の構成員として知っておくべきこと」、一般教養は「常識に対してプラスアルファとなる部分である」ということが、各自の言葉から認識された。各自が専門の分野での話と、これまでの経験から意味づけと差異の明確化を行おうとしたため、言葉も微妙なニュアンスも異なっていたが、両者は同じことを指しているのではないということ、一般教養にはプラスアルファの要素「らしきもの」があるという点で全員が類似的な理解を得ることができた。この状態がアコモデーションである。その際に、コーディネーターは、必ず

全員から意見をもらうように話を振り、わかりにくい用語については説明を求め、全員が話題に対してコミットメントができるような工夫をした。それにより、異分野の学生の話にも皆が耳を傾け、互いにある程度納得した状態で議論を進めることができた。

また、最後にそれぞれが「一般教養」の定義付けを行う時、全員の意見をホワイトボードに書き出した。似たような意見でもその微妙な差異を無視せず、別個の意見として取り扱った。参加者はおおよそ 10 人であり、10 通りの意見が出たわけだが、各意見は緩やかな共通の枠組みに入るものであり、かつ異なる価値観を含むものとなり、アコモデーションに行き付くことができた。

4. 結論

本稿では、学際コミュニケーションの定義・目的、コミュニケーションにおけるコンフリクトの要因について説明し、事例をもとにアコモデーションという概念が学際コミュニケーションの円滑化にとって重要であるということが示された。

学際コミュニケーションは異分野間の知識を融合させていくというその性質上、段階的に発展させていく必要がある。まずは学際コミュニケーションの場をつくり、そこに一定の目的を持って参加してもらい、各自の意見を学際的テーマに反映させるために、コンフリクトを解決しやすくする環境作りが必要となる。

そして、これらの根底にあるのが、アコモデーションである。アコモデーションをゴールとし、その達成を成員に意識させることで、円滑な学際コミュニケーションが可能となる。

謝辞

本研究は北陸先端科学技術大学院大学 21 世紀 COE プログラムの一環のとして行われたものである。本研究に関して、COE センターの方々、及び学際コミュニケーション

研究会に参加して下さい下さった方々に感謝の意を表する。

参考文献

- [1] 赤司秀明・一司信, 学際研究入門: 超情報化時代のキーワード, コスモトゥーワン, 1997
- [2] 植村勝彦・松本青也・藤井正志, コミュニケーション学入門, ナカニシヤ出版, 2000
- [3] 深田博巳編, コミュニケーション心理学, 北大路書房, 1999
- [4] 藤垣裕子, 学際研究遂行の障害と知識の統合ー異分野のコミュニケーション障害を中心としてー, 研究技術計画, 1995
- [5] 入江幸男・霜田求編, コミュニケーション理論の射程, ナカニシヤ出版, 2000
- [6] 狩俣正雄, 組織のコミュニケーション論, 中央経済社, 1992
- [7] 関口一郎編, コミュニケーションのしくみと作用, 大修館書店, 1999
- [8] 木嶋恭一, 交渉とアコモデーション, 日科技連出版社, 1996